半七捕物帳

狐と僧

岡本綺堂

一

「これも狐の話ですよ。しかし、これはわたくしが自身に手がけた事件です」と、半七老人は笑った。

嘉永二年の秋である。江戸の谷中(やなか)の時光寺という古い寺で不思議の噂が伝えられた。それはその寺の住職の英善というのが、いつの間にか狐になっていたというのである。実に途方もない奇怪な出来事ではあるが、寺の方からその届け出があった以上、寺社奉行も単にばかばかしいといって捨てて置くわけにも行かなかっ

た。

時光寺はあまり大きい寺ではないが、由緒のある寺で、その寺格も低くなかった。住職の英善は今年四十一歳で、七年ほど前から先住のあとを受けついで、これまでに変った噂もきこえなかった。ほかに善了という二十一歳の納所（なっしょ）と、英俊という十三歳の小坊主と、伴助という五十五歳の寺男と、あわせて三人がこの寺内に住んでいた。伴助は耳の遠い男であったが、正直者として住職に可愛がられていた。

こうして何事もなく過ぎているうちに、思いもよらない事件が出来（しゅったい）して、檀家は勿論、世間の人々をもお

どろかしたのである。事件の起る前夜、住職の英善は、根岸の伊賀屋という道具屋の仏事にまねかれて、小坊主の英俊を連れて出たが、四ツ（午後十時）少し前に英俊だけが帰って来た。師匠は途中でこれからほかへ廻るから、おまえは先へ帰れといったので、小坊主はそのまま別れて来たのであった。

夜なかになっても住職は戻らないので、寺でも心配した。伴助は提灯を持って幾たびか途中まで迎いに出て行ったが、英善の姿はみえなかった。こうして不安の一夜を送った後、この寺から二町ほど距（はな）れた無総寺という寺のまえの大きい溝（どぶ）のなかに、英善によく似た

者のすがたが発見された。それはあくる朝のことで、いつも早起きの無総寺の寺男が見つけ出したのであるが、溝にはまり込んで死んでいたのは、人間ではなかった。それは法衣（ころも）や袈裟（けさ）をつけている狐であった。寺男はびっくりして、ほかの人々にも報告したので、たちまちこのあたりの大騒ぎとなった。

袈裟や法衣をつけている者の正体はたしかに年経（ふ）る狐に相違なかった。死体の傍には数珠（じゅず）も落ちていた。小さい折本の観音経も落ちていた。履物はどこにも見えなかったが、その袈裟と法衣と、数珠と経文（きょうもん）と、それらの品々がことごとく時光寺の住職の持ち物に符合

するばかりか、その経文の折本のうちには時光寺と明らかに書いてあるので、誰もそれをうたがうことは出来なかった。殊にその本人の英善がゆうべから戻って来ないのであるから、諸人はいよいよこの奇怪な出来事を信ずるよりほかはなかった。唯ここに残された問題は、英善がゆうべこの狐にたぶらかされて、その衣類や持ち物を奪われたのか、或いはその以前から本人の正体はどこかへ消えてしまって、狐が住職になり澄ましていたのかということで、その疑問は容易に解決されなかった。

無総寺の寺男の話によると、夜なかに門前で頻(しき)りに

犬の吠える声を聴いたというのである。英善に化けた狐は犬の群れに追いつめられて、この溝のなかへはまり込んで死んだのであろうと彼は云った。ほかの人々もそんなことであろうと思った。

「なるほど、そういえば此の頃は、うちの御住持さまは大変に犬を嫌っていなすった」と、時光寺の納所(なっしょ)も云った。

以前はそうでもなかったが、この一、二カ月まえから住職の英善がひどく犬を嫌うようになったことは、納所の善了も寺男の伴助も認めていた。これらの事実を綜合してかんがえると、人間の英善はこの夏の末頃

から消えてなくなって、狐の英善が住職になり代っていたらしい。伯蔵主（はくぞうす）の狐や茂林寺（もりんじ）の狸のむかし話なども思いあわされて、諸人も奇異の感にうたれながら、とにもかくにも一ヵ寺の住職の身のうえにこういう椿事が出来（しゅったい）したのであるから、単に不思議がってばかりはいられなかった。時光寺からは有りのままに届け出て、寺社奉行はその詮索（せんさく）に取りかかったのであった。

　時光寺の納所も小坊主も寺男も、みな厳重に吟味された。奇怪な死体をはじめて発見したという無総寺の寺男も勿論取り調べられた。しかも彼等の口から何の手がかりを聴き出すことも出来なかった。住職は近頃

犬を嫌うようになったという以外には、時光寺の者共も別に思い当ることはないと申し立てた。もしや住職の死骸を発見することもあろうかと、時光寺の床下や物置や、庭の大木の根もとなどを掘り返してみたが、死骸はおろか、それかと思われるような骨一つすらも見いだされなかった。檀家の主なるものも調べられた。その当夜、自宅の仏事に時光寺の住職を招いたという根岸の伊賀屋嘉右衛門も吟味をうけたが、伊賀屋でも当夜の住職の挙動について別に怪しい点を認めなかったと答えた。

寺社奉行の方でもこの上に詮議のしようもなかった。

時光寺の住職はゆくえ不明になって、いつの間にか狐がその姿になりかわっていたというほかには、なんとも判断のくだしようもないので、その詮議はひと先ずこれで打ち切ることになった。

二

九月の末には陰(くも)った日がつづいた。神田の半七は近所の葬式(とむらい)を見送って、谷中(やなか)の或る寺まで行った。ゆう七ツ（午後四時）過ぎに寺を出て、ほかの会葬者よりも一と足さきにぶらぶら帰ってくると、秋の空はいよ

いよ暗くなった。寺の多い谷中のさびしい道には、木の葉が雨のように降っていた。まだ暮れ切らないのに、どこかの森のなかで狐の声がきこえた。半七はこのごろ世間の噂になっている時光寺の一件をふと思い出した。かれは町奉行付きで、寺社奉行の方には直接の係り合いはないのであるが、それでも自分の役目として、今度の奇怪な出来事に相当の注意を払っていた。

「無総寺というのはこの辺かしら」

そう思いながら歩いてくると、ある寺の土塀に沿うた大きい溝のふちに、ひとりの少年が腹這いになっているのを見た。少年は十三四歳の小坊主で、土のうえ

に俯伏（うつぶ）しながら何か溝のなかの物を拾おうとしているらしかった。半七はそのまま通り過ぎようとして、なに心なくその寺の門を見あげると、門の額（がく）に無総寺と記（しる）してあったので、かれは俄かに立ちどまった。時光寺の住職に化けていた狐の死骸は、ここの大溝から発見されたというのである。その溝のふちに小坊主が腹這いになって何か探しているらしいのを、半七は見すごすことが出来なかった。かれは立ち寄って声をかけた。

「お小僧さん。なにか落したのかえ」

それが耳にもはいらないらしく、小坊主は熱心にな

にか拾おうとしていた。しかしまだ十三四の子供の手では溝の底までとどかないので、かれは思い切って下駄をぬいで、石垣を伝(つた)って降りようとするらしかった。
半七は再び声をかけた。
「もし、もし、お小僧さん。なにを取ろうとするんだ。なにか落したのなら、わたしが取ってあげる」
小坊主は初めて振りかえったが、返事もしないで黙っていた。半七はかがんで溝をのぞくと、底はさのみ深くもなかった。苔(こけ)の多い石垣のあいだから幾株の芒(すすき)や秋草が水の上に垂れかかって、岸の近いところには、湿(ぬ)れた泥があらわれていた。それを見まわして

いるうちに、ある物が半七の眼についた。
「おまえさん。あれを取ろうというのかえ」と、半七は溝のなかを指さして訊（き）いた。
　小坊主は黙ってうなずいた。こんなことには馴れている半七は、草履の片足を石垣のなかほどに踏（ふ）みかけて、片手に芒の根をつかみながら、からだを落すようにして岸に近い泥のなかへ片手を突っ込んだ。彼がやがて摑み出したのは小さい仏の像であった。仏は二寸に足らないもので、なにか黒ずんだ金物で作られているらしく、小さい割合にはなかなか目方があった。
「この仏さまをお前さんは知っているのかえ」と、半

七は泥だらけになっている仏像を小坊主の眼のさきへ突きつけると、かれはそれをうやうやしく受け取って、自分の法衣（ころも）の袖のうえに乗せた。

「おまえさんのお寺はどこだね」と、半七はまた訊（き）いた。

「時光寺でございます」

「むむ。時光寺か」

半七はあらためてその小坊主の顔をみた。かれは色の白い、眼の大きい、見るからに利口そうな少年であった。

「じゃあ、このあいだ和尚（おしょう）さんの一件のあったお寺だ

な。そこで、その仏さまはお前さんが落したのかえ」

「今ここで見つけたのです」

「じゃあ、おまえさんのじゃあ無いんだね」

小坊主はその返答に躊躇しているようであったが、結局、これは自分の寺のものであるらしいと云った。

「お寺の物がどうしてこの溝のなかに落ちていたんだろう」と、半七はかれの顔色をうかがいながら訊いたが、小坊主はやはり何か躊躇しているらしく、口唇（くちびる）をむすんだままで少しうつむいていた。

この小さい仏像について何かの秘密があるらしいと睨んだので、半七はたたみかけて訊いた。

「和尚さんはここらの溝のなかに死んでいたんだそうだね」

「はい」

「そこにその仏像が落ちていて、しかもそれがお寺の物だという。そうすると、和尚さんの落ちた時に、それも一緒に落したのかね」

「そうかも知れません」

「隠しちゃいけねえ。正直に云って貰いたい」と、半七はすこし詞（ことば）をあらためた。「実はわたしは町方（まちかた）の御用聞きだ。寺社とお係りは違うけれど、こういうところへ来あわせては、調べるだけのことは調べて置かな

ければならねえ。その晩、和尚さんがその仏さまを持って出たのかえ」

　相手の身分を聴くと共に、小坊主の態度は俄かに変った。かれは今までとは打って変って、半七の問いに対して、何でもはきはきと答えた。

　かれは時光寺の英俊であった。師匠の英善がゆくえ不明になった晩、かれは師匠の供をして根岸の伊賀屋へ行った。読経（どきょう）がすんで、一緒に連れ立って帰る途中、師匠はほかへ路寄りすると云って別れたまま再び戻って来ない。そうして、そのあくる朝、師匠の袈裟法衣をつけた狐の死骸がこの溝の中に発見されたのである。

それがどう考えても判らないので、かれは絶えずそれを考えつめていると、今日この溝のふちを通るときに、測らずも泥のなかに何か薄黒く光るようなものを見つけたのであった。仏像はおそらく師匠の袂（たもと）かふところに入れてあって、ここへ転げ込むときに水のなかへ滑り落ちたのを誰も見つけ出さなかったのであろう。毎日陰（くも）ってはいるが、この頃すこしも雨がないので、溝の水もだんだんに乾いて、泥に埋められていた仏像が自然にその形をあらわしたのであろう。自分にもよく判らないが、これは寺の秘仏として大切に保管されているものであるらしい。なんでも遠い昔に異朝から

渡来したもので、その胎内には更に小さい黄金仏が孕（はら）ませてあると云いつたえられている。自分は九つの年から寺に入って、足かけ五年のあいだに三度しか拝んだことはないが、これはどうもその仏像であるらしいと彼は説明した。

それほど大切の秘仏を住職がなぜむやみに持ち出したか、それが半七にも判らなかった。英俊にも判らなかった。

「しかしこれをみると、狐がお住持に化けていたなどというのは嘘です」と、英俊は云った。「わたしも最初から疑わしいと思っていましたが、もし狐ならばこう

いうものを持ち出す筈がありません。狐や狸は尊い仏を恐れる筈です」
　それは如何にも仏弟子らしい解釈であった。半七は又それと違った解釈で、時光寺の住職の正体が狐でないことを確かめた。
「お住持は……お師匠さまは……」と、英俊は俄かに泣き出した。
「おい。どうした、どうした」と、半七はかれの肩に手をかけた。
　英俊はその肩をゆすぶって泣きつづけた。かれの涙は法衣の袖にほろほろとこぼれて、大切にさげていた

異国の仏像の御首（みぐし）にも流れ落ちた。

「泣くことはねえ。おれがその仇を取ってやる」と、半七は云った。「その代り、おまえの知っているだけのことは何でも話してくれねえじゃあいけねえ。といって、いつまでもここで立ち話も出来めえ。あしたの朝、わたしの家まで来てくれ。神田の三河町で、半七と聞けばすぐ判る」

三

あくる朝、英俊は約束通りに半七をたずねて来た。

そうして、師匠の英善の身のうえに就いて自分の知っているだけのことを詳(くわ)しく話して帰った。帰る時に、半七はかれに何事かを教えてやった。それからすぐに身支度をして、半七も寺社奉行の役宅へ出て行った。

寺社方の許可を得て、かれは何かの活動に取りかかるらしく、役宅から帰ると更に子分の松吉と亀八を呼びよせた。

「ひょっとすると草鞋(わらじ)を穿(は)くかも知れねえ。そのつもりで支度をして置け」

午(ひる)すぎになって英俊がふたたび来た。

「親分さん。安蔵寺の三人はきのうの朝、一挺の駕籠

を吊らせて帰ったそうです」

「駕籠は一挺か」と、半七は少し考えた。「そこで、どうだろう。その頭(かしら)の坊主は……」

「昌典という人はまだ残っているらしいのです」

「よし。じゃあ、すぐに出かけよう。一日の違いなら何とかなるだろう。もう一日早ければ訳はなかったのだが、どうも仕方がねえ」

半七は二人の子分をつれて、俄かに甲州街道の方角へ旅立ちすることになった。かれは見識り人として英俊をも連れて行かなければならなかったが、まだ十三の少年が足の早い彼等と共にあるくことは出来そうも

ないのと、彼等もゆく手を急ぐのとで、四挺の駕籠を雇って神田を出たのは其の日の八ツ（午後二時）を過ぎた頃であった。

先をいそぐ四人は御用の旅という触れ込みで、むやみに駕籠を急がせた。新宿で駕籠をかえて其の晩のうちに府中の宿（しゅく）まで乗りつけた。あくる朝七ツ（午前四時）ごろに宿屋を立って、日野、八王子、駒木野、小仏、小原、与瀬、吉野、関野、上の原、鶴川、野田尻、犬目、下鳥沢、鳥沢の宿々あわせて十六里あまりを駕籠で急がせた。自分たちはともかくも、旅馴れない上に年のゆかない英俊がもし途中で弱るようなこと

があってはならないと、立場（たてば）々々へ着くたびに半七はかれに気つけ薬を飲ませて介抱したが、英俊はちっとも弱らなかった。彼は一刻も早くお師匠さまを救ってくれと、それぱかりを繰り返していた。

「お小僧さん、なかなか強いな」と、子分たちも励ますように云った。

　鳥沢の宿へはいったのは夜の五ツ頃で、夕方から細かい雨がしとしとと降り出していた。今夜のうちに次の宿の猿橋まで乗り込みたいと思ったが、あいにくに雨が降るのと、駕籠屋も疲れ切っているのとで、半七はここで今日の旅を終ることにして、駕籠のなかから

声をかけた。

「おい、若い衆さん。この宿でどこかいい家へつけてくれ」

「はい、はい」

雨はだんだん強くなって来たのと、泊まりの時刻をもう過ぎたのとで、暗い宿の旅籠屋では大戸をおろしているのもあった。四挺の駕籠が宿の中まで来かかると、左側の小さい旅籠屋のまえに一挺の駕籠のおろされているのが眼についたので、半七は自分の駕籠の垂簾をあげて透かして視ると、その駕籠は今この旅籠屋に乗りつけたらしく、駕籠のそばには二人の男が

立っていた。ひとりは内にはいって店の番頭となにか掛け合っているらしかった。その三人がいずれも旅僧であることを覚った時、半七はすぐに自分の駕籠を停めさせた。その合図を聞いて子分の松吉と亀八もつづいて駕籠を出た。英俊も出た。四人は雨のなかを滑りながら駈け出して、ばらばらとその旅籠屋の店さきへはいった。

駕籠の脇に立っている旅僧の一人は、英俊の顔をみて俄かにうろたえたらしく、あわててほかの僧を見かえる間に、松吉と亀八はもうそのうしろを取りまくように迫っていた。

「失礼でございますが、このお駕籠にはどなたがお乗りです」と、半七は丁寧に訊（き）いた。

ふたりの僧は黙っていた。

「では、御免を蒙（こうむ）って、ちょっとのぞかせて頂きます」

再び丁寧にことわって、半七は桐油（とうゆ）紙を着せてある駕籠の垂簾（たれ）を少しまくりあげると、中には白い着物を着ている僧が乗っていた。英俊は泣き声をあげてその前にひざまずいた。

「お師匠さま」

僧は眼を動かすばかりで、口を利かなかった。彼はいつまでも無言であった。英俊は彼の袖にすがって再

び呼んだ。

「お師匠さま」

無言の僧は時光寺の住職英善であった。かれが無言であるのは、声を出すことの出来ないような一種の薬を飲まされていたのであった。

「もうここまで来れば、あとは詳しく云うまでもありますまい」と、半七老人は云った。「ところで、なぜこんな事件が起ったかというと、この宗旨の本山の方に何か面倒な事件があって、こんにちの詞（ことば）でいえば、本山擁護派と本山反対派の二派にわかれて暗闘を始めて

いたというわけなんです。それがだんだんに激しくなって、本山の方からも幾人かの坊主が出府（しゅっぷ）して、江戸の末寺を説き伏せようとする。末寺の方では思い思いに党を組んで騒ぎ立てる。その中でも時光寺の住職は有力な反対派の一人、まかり間違えば寺社奉行へまで持ち出して裁決を仰ごうという意気込みなので、本山派の方で持て余して、なんとかしてこの住職をなき者にしよう……。といって、出家同士のことですから、まさか殺すわけにも行かないので、この住職を本山へ連れて行って、当分押し込めて置こうということになったのです。そこで、住職がいつの晩には根岸の檀

家へ出かけて行くというのを知って、帰る途中を待ち受けて、腕ずくで取っつかまえて下谷坂本の安蔵寺という本山派の寺へ連れ込んでしまったのです。そうして、口を利くことの出来ないように、毒薬を飲ませたのだそうです」

「そうなると、例の狐はその身代（みがわ）りなんですね」

「そうです、そうです」と、老人はうなずいた。「一カ寺の住職がただ消えてなくなったというのでは、詮議がむずかしかろうという懸念（けねん）から、住職の袈裟（けさ）や法衣（ころも）をはぎ取って、それを狐に着せて……。いや、今からかんがえると子供だましのようですが、それでもよっ

ぽど知恵を絞ったのでしょう」

「ところで、大切の仏像というのはどうしたんです。やはりその住職が持っていたんですか」

「いつの代でも、なにかの問題で騒ぎ立てれば相当の運動費がいります。時光寺は本来小さい寺である上に、住職が本山反対運動に奔走(ほんそう)しているので、その内証は余程苦しい。まして寺社奉行へでも持ち出すとすれば、また相当の費用もかかる。それらの運動費を調達するために、住職は大切の秘仏をそっと持ち出して、それを質(かた)に伊賀屋から幾らか借り出そうとして、仏事の晩にそれを厨子(ずし)に納めて持ち込んだのですが、ほかに大

勢の人がいたので云い出す機(おり)がなくって一旦は帰ったのです。しかしどうしても金の入用に迫っているので、途中から小坊主を帰して、自分ひとりで伊賀屋へまた引っ返す途中、運悪く本山派の罠(わな)にかかって、持っていた厨子は無論に取りあげられてしまったのですが、その時に住職が手早く仏像だけをぬき出して自分の袂(たもと)へ隠したのを、相手の者は気がつかなかったと見えます」

「その落着(らくぢゃく)はどうなりました」

「事件もこうなると大問題です」と、老人は眉をしかめて云った。「無論に寺社方の裁判になりました。本

山から出府している坊主は十一人ありましたが、ほかの寺に宿を取っていた七人はこの事件に関係がないというので免(ゆる)されました。安蔵寺に泊まっていた四人、その三人は住職の駕籠について行き、一人は江戸に残っていましたが、いずれも召し捕って入牢(じゅろう)申し付けられ、その中で二人は牢死、二人は遠島になりました。時光寺の納所(なっしょ)の善了も本山派に内通していたという疑いをうけて、寺を逐(お)い出されたそうです。この事件も手をひろげたら随分大きくなるでしょうが、本山の方へは一切(いっさい)手を着けずに、江戸だけで片付けてしまいましたから、前にいった四人のほかには罪人も出ません

でした。時光寺の住職はその後に療治をして、すこしは声が出るようになったので、やはり元の寺に勤めていましたが、上野の戦争のときに彰義隊の落武者（おちむしゃ）をかくまったというので、寺にも居にくくなって、京都の方へ行ったそうです。英俊は利口な小僧で、その時に師匠と一緒に行って、今では京都の大きい寺の住職になっていると聞きました。なにしろこの探索では小坊主が大立物（おおだてもの）で、その口から本山派と反対派の捫著（もんちゃく）を聴いたので、わたくしもそれから初めて探索の筋道をたてたようなわけですからね。今でも時々あるようですが、むかしも寺々の捫著はたびたびで、寺社奉行を

手古摺らせたものですよ」
併しそこにまだ一つの疑問が残されていた。それは時光寺の住職がかの事件の起る以前からと俄かに犬を嫌うようになったということである。私はそれを聞きただすと、老人は笑って答えた。
「それはなんにも係り合いのないことなんです。住職が犬を嫌うようになったというので、おそらく狐が化けていたのだろうなどという疑いも起って来たんですが、だんだん調べてみると斯ういうわけでした。住職は出家のことで、ふだんから畜類を可愛がっていたんですが、本山反対の運動を起してから、こんにちの詞

でいえば神経が興奮したとでもいうのでしょう。なんだか苛々（いらいら）したような気分になって、今まで可愛がっていた犬などにも眼をくれず、犬の方から尻尾（しっぽ）をふって近寄っても、怖い顔をして追っ払うという風になった。そこへ例の一件が出来（しゅったい）したもんですから、それが又何だか仔細ありげに云い触らされるようになったのです。一体この事件にかぎらず、わたくし共の方ではよくこんな事でいろいろ思い違いや見込み違いをすることがあります。無事の時ならばなんでもないことが、大仰（おおぎょう）に仔細ありげに考えられますから、よっぽど注意しないといけません。探索という上から見れば、髪

の毛一本でも決して見逃がしてはなりませんが、所詮は大体のうえに眼をつけて、それから細かいところへ踏み込んで行かないと、前にも云ったような、「飛んだ見込み違いで横道へそれてしまうことがありますよ」

底本：「時代推理小説　半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行
入力：tatsuki
校正：山本奈津恵
1999年9月22日公開
2004年2月29日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。